



TITLE:

公羊家の理想とする大同の社會

AUTHOR(S):

小島, 祐馬

CITATION:

小島, 祐馬. 公羊家の理想とする大同の社會. 經濟論叢 1919, 8(6): 730-742

ISSUE DATE:

1919-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127538>

RIGHT:

部學法學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷八第

行發日一月六年八正大

論 說

資本税の課徴方法……………法學博士 神戸 正雄

公羊家の理想とする大同の社會……………法學士 小島 祐馬

割地の發生并に發達についての考察……………法學博士 牧野信之助

企業の經濟的及び道德的性質……………法學博士 田島 錦治

經濟循環期論(四、完)……………法學博士 財部 靜治

植民地領有の目的(三、完)……………法學博士 山本美越乃

米國のI.W.W.運動の研究(三)……………文學士 米田庄太郎

紙幣の減價に就いて(三、完)……………文學士 高田 保馬

時事問題

收入豫算の見積を論ず(二)……………法學博士 小川郷太郎

少年勞働及徹夜業の禁止……………法學博士 戸田 海市

雜 錄

英國の勞働不安……………法學博士 河田 嗣郎

ピユツヘルの經濟階段說に就いて……………法學士 本庄榮治郎

公羊家の理想とする大同の社會

小 島 祐 馬

大同の社會とは『禮記』禮運篇の冒頭に見ゆる一の理想社會である。其記事によれば孔子魯に仕へて或時蜡祭の賓と爲つたことがあつたが、祭事畢りて出で、觀の上に遊息し、喟然として嘆聲を發せられた。門人子游側に在り、其何事を嘆息するかを聞きしに、孔子之に答へて、昔大道の行はれし大同の世と、禮治の行はれし小康の世と、二種の社會が相繼いで現はれたのであるが、自分は衰世に生れ何れの時代にも遭遇し得ざるを遺憾とすると言はれたとある。尤茲に大同の世と小康の世と二つの社會を擧げて居るが、中にも大同の世は其最高の理想とする所であつて、其社會狀態は次の如きものなりとするのである。

『大道之行也。天下爲_レ公。選_レ賢與_レ能。講_レ信修_レ睦。故人不_レ獨親_レ其親。不_レ獨子_レ其子。使_レ老有_レ所_レ終。壯有_レ所_レ用。幼有_レ所_レ長。矜寡孤獨廢疾者。皆有_レ所_レ養。男有_レ分。女有_レ歸。貨惡_レ其棄_レ於地_レ也。不_レ必藏_レ於己_レ。力惡_レ其不出_レ於身_レ也。不_レ必爲_レ己_レ。是故謀閉而不興。盜竊亂賊而不作。故外戶而不閉。是謂_レ大同。』

今注釋家の說に據り此一文を解説せんに、先づ天下を公と爲すとは天下を以て或一人に私せざ

1) 『禮記』禮運篇

るを謂ふのである。もと天下は天下人の共有の器にて一人一家の私有し得る所でない。故に之を公にして聖徳ある者に委ね、敢て一個人の子孫兄弟には傳へないのである。斯くて德行あり道藝ある者を選擧して以て要職に任じ、平素人民の一般に講習する所は誠信、修爲する所は和睦といふことである。固より父母は人の最親しむ所、子は人の最愛する所であるが、併し唯自ら其親を親しみ自ら其子を愛するのみにて人の親を親します人の子を愛せざれば社會の平和は到底望まれない。されば此社會に在りては人々其親を親しみ以て人の親に及ぼし、其子を愛して以て人の子に及ぼし、以て萬民同愛の實を擧ぐるのである。既に私親私愛なく四海一の如くなるが故に、天下の老者は皆贍養を得て其餘命を終へ、壯者は皆遊民と爲らずして其業に勵み、幼者は皆保育を得て成人することを得、矜寡孤獨廢疾の者も皆恤養を得て貧苦窮乏を嘆ずるものはない。而して男子は各分職ありて、才無き者は耕作に従事し、能ある者は政治を擔當し、女子は皆良奥の家を得て嫁期を失する者ではない。又財貨の如きも公産ありて私産はない。是れ既に天下を公有とする以上獨り財貨のみ私藏を許すべきでない。但人若し收録せずして山野に棄擲すれば、天物を壞敗して資り用ふることが出来ぬ。故に各人收めて之を保管するのみであつて、之を藏し己の有と爲すのではない、若し乏しき者あらば即ち之に施し與ふるのである。又勞働といふことも公共の爲めにして自己の爲めにするのではない。即ち人が勞苦を憚らず各筋力を竭す所以は、自ら力を惜みて産業を務めず専ら養を人に仰ぐを嫌ふが爲めであつて、全く自己一身の利益の爲めに營爲するものではない。扱此の如く天下一心親の如く子の如く和睦したならば權術詐謀などいふ

ことは施すに所がないのである。人々教養を公産に待ち乏しき者あらば輒ち與ふるが如くならば盜竊亂賊は如何にしても起りやうが無いのである。されば此社會に於ては人家扉を設くるも敢て捍拒する所あるに非ず、専ら風塵を防ぐの用に供するのみにて、從つて扉は外より闔じ關閉を用ひない。是れが即ち大同の世の有様である。

然らば謂ふ所の小康の社會狀態は果して如何といふに、そは次の如き文字によつて示されて居る。

『今大道既隱。天下爲_レ家。各親_二其親_一。各子_二其子_一。貨力爲_レ己。大人世及以爲_レ禮。城郭溝池以爲_レ固。禮義以爲_レ紀。以正_二君臣_一。以篤_二父子_一。以睦_二兄弟_一。以和_二夫婦_一。以設_二制度_一。以立_二田里_一。以賢_二勇知_一。以功爲_レ己。故謀用_レ是作。而兵由_レ此起。禹湯文武成王周公。由_レ此其選也。此六君子者。未_レ有_二不_レ謹_一於禮_二者_一也。以著_二其義_一。以考_二其信_一。著_レ有_レ過。刑_レ仁_レ講_レ讓。示_二民有_レ常。如有_二不_レ由_レ此者_一。在_レ勢者去。衆以爲_レ殃。是謂_二小康_一。』

言ふところは大道既に隱れて行はれず、天下皆自己に私するといふことが此社會の特徴である。君主は天下を以て私家の物と爲して子孫に傳へ之を天下に公にせず、四海の民各其親を親しみ其子を愛して人の親人の子に及ばず。財貨を藏するは皆自己を利せんが爲めにして勞働を敢てするは皆私欲を充たさんが爲めである。既に各人が私を營み己を利することのみ計る以上は爭奪排は免れざる所である。されば上位に在る者は其地位を世襲して以て禮と爲し、城郭溝池を爲りて以て自ら護衛する必要が生ずるのである。凡そかかる社會に於て最重要なる者は禮義である。

此禮義を用ひて社會の秩序を維持するのである。即ち之を以て君臣を正し父子を篤くし兄弟を睦し
くし夫婦を和せしめ、又之を以て宮室衣服車旗飲食の上に上下貴賤に應じて制度を立て、耕作の
地居住の所亦上下貴賤によりて其品を異にすることとする。又此社會に於ては爭奪并行はるるが
故に勇に須つ所があるのである、互に相欺妄するが故に知に須つ所があるのである、是れ勇知の
士の崇重せらるる所以である。功を立て事を起す皆他人の爲めにせぬ、故に姦詐作り戦争が起る
のである。古の禹湯文武成王周公の六君主は此かる社會に處するに能く禮義を以て教化を成し遂
げたもので英異の君と爲すべきである。誠に此六君主は禮義を謹み能く次の五事を行つた、即ち
民に失ふ所あらば禮を用ひて之を裁斷して其宜しきを得しめ、民に相欺くあらば禮を用ひて之を
考して信ならしめ、民罪あらば禮を用ひて之を照明し、民仁ならば禮を用ひて之を賞して則と爲
さしめ、民爭奪すれば禮を用ひて之を講説して推讓せしめた、畢竟此五事を以て民に示し以て常
法と爲さしめたのである。若し君主にして禮義を謹み此五事を行ふことを爲さざる者あらば、衆
人必ず以て禍惡と爲し、罪を以て之を富貴勢位より退くるに至る。是が小康の世の有様である。

今禮運篇全體の主旨を大觀するに、孔子は言ふまでもなく徳治の極致なる大同の世を以て其最
高の理想となす者であるが、而も其生衰亂の時代に當り到底一足飛びに大同の世を冀ふことが出
來ない。そこで已むことを得ず順序として先づ禮治を實行せる小康の世を實現せしめんとしたも
のと思はれる。されば禮運といふ名稱も此小康の道によつて名づけたるものにして、従つて禮運
篇の大部分は禮の由つて起る原因を詳説し、禮の尊崇すべき所以を高調したものである。

猶小康の世に於て禹湯文武を挙げ三代英主の治を稱述せるより、大同の世は更に溯りて五帝の代のことを説けるものとするが普通の解釋である。然るに五帝の代と言ひ三代と言ひ此に描寫する如き社會が過去に實現せられしものとは此篇の作者自身と雖恐らく想像せざる所であらう。唯由來支那人は其理想郷を描くに當り之を將來に描かずして過去に描くが普通である。是れ蓋し實際的なる支那人に對しては漠然たる空想を未來に指示すよりも、是は既に過去に於て嘗て實現せられたる所であると言ふ方、人心に入り易きが爲めであらうと思ふ。従つて作者自身の意は常に過去の事實に假りて將來に理想社會を現出せしめんとするに在るも、それが誤つて單に過去を尊重するの思想を醸成し、爲めに吾人の理想は既に過去の事に屬すとなし、現在及び將來に對し絶望の念を抱くといふ弊に陷つたものが支那人の所謂尙古癖といふものであらう。尤次に述ぶる所の公羊家の思想に在りては其理想を描くに當つて稍其傾向を異にするものがあるのである。

二

大同の社會は前に述ぶる如く小康の社會と共に一の理想社會として『禮記』禮運篇の中に述べられて居る所であるが、近來支那の學者殊に公羊學者の間に於て此大同といふことが頻りに唱道せらるゝやうになつた。されば今茲に公羊家の學說の一斑を紹介し、それが如何にして大同の理想と結び付いて居るかを述べてみようと思ふ。

叔公羊家とは主として『春秋』といふ經書に對し一種の見解を持する學派の名であるが、此派の學者に従へば經書とは孔子の理想を述べたるものにして、此點に於て單に事實を記せる歴史と其

趣を異にするものとするのである。されば孔子の『春秋』は之を以て魯の十二公二百四十二年間の歴史を傳へたるものに非ずして、此事實を假り來りて將來に對する自己の理想を述べたるもの從つて實際の史實とは一致するものではないとする。而して其事實を假り來りたるは何故なりやといふに、之を空言に託するは事實によりて示すことの深切著明なるに如かざるが爲めであるといつて居る。是は學者が理想を描く形式に於て支那一般の形式と稍異なる點である。固より公羊家と雖單に之を空言に託せずして過去の事實を假り來りたる點に於ては、支那一般の形式と一致する所もあれど、其事實たるや初めより假定的のものなりと公言し、且後に述ぶるが如く社會は進化するものにして過去よりも將來に於て次第に理想に近づくものなることを明示する點に於て獨り異彩を放つて居るものがあると思ふ。

公羊家は『春秋』の大義微言といふことを力説するものである。即ち『春秋』は亂賊を誅討して後世を戒しむると共に、法制を改立して太平を致さんとするの理想を寓したるものとするのである。そこで其理想を表示する爲めに種々の義例といふ者が存するのであるが、中にも三科九旨といふことは其最大切なる事となつて居る。三科とは一に存三統、二に張三世、三に異内外³⁾といふことである。此三科が更に各三條に分るゝによつて九旨といふことになるのである。此中存三統とは『細』夏、存周、以『春秋』當新王⁴⁾といふことにて、一言にて掩へば政治的革命を是認するといふことである。然るに此點は前の大同の理想と直接の關係を有せざるが故に姑く之を措き、茲には専ら張三世と異内外の二科に就いて説明を試みやう。

3) 三科九旨の解は何休『文詁例』の説に従ふ。

4) 董仲舒『春秋繁露』三代改制質文篇

『春秋公羊傳』を觀れば傳の語の中に『所見異辭、所聞異辭、所傳聞異辭』とありて、何休其下に註して次の如く言つて居る。

『於所傳聞之世。見治起於衰亂之中。用心尚麗物。故內其國而外諸夏。先詳內而後治外。……於所聞之世。見治升平。內諸夏而外夷狄。……至所見之世。著治太平。夷狄進至於爵。天下遠近小大若一。』⁵⁾

此一節は張三世と異内外の思想を最能く表はせるものである。先づ張三世より説かんに、張三世とは即ち『所見異辭、所聞異辭、所傳聞異辭』といふことである。是は如何なる意味かといふに孔子『春秋』の書法が時代によりて同じからざるを謂ふのである。是れ『春秋』は隱桓莊閔僖文宣成襄昭定哀の十二公二百四十二年の出來事を記したるものなるが、此時代を孔子自身を標準として其遠近により三期に大別する。即ち所見の世とは昭定哀三公の時にて孔子自身と其父との時代に當り、所聞の世とは文宣成襄四公の時にて孔子の王父の時代に當り、所傳聞の世とは隱桓莊閔僖五公の時にいひ孔子の曾祖高祖の時代に當る。而して異辭と稱して此三世に應じて孔子の書法が異り居り、孔子に近き時代に於ては叙事を詳密にし、其時代の遠かるに従ひ之を粗略にして居るといふのである。然し若し張三世といふことが單にそれだけの事に止まるならば特に重要な意味を有することにはならぬのであるが、併し前の何休の註にも見ゆる如く公羊家が此所傳聞の世を以て衰亂の時代と爲し、所聞の世を以て升平の時代と爲し、所見の世を以て太平の時代となしたる事によつて、三世といふことが公羊家の非常大義とする理想を託することゝなつた譯で

5) 『春秋公羊傳』隱公元年傳

6) 『春秋公羊解詁』隱公元年註

7) 『春秋繁露』楚莊王篇及び『春秋公羊解詁』隱公元年註に據る

ある。固より史實よりいへば春秋時代は隱桓以下年を追うて益衰亂に赴き、實際升平太平の時代あることはない。然れども公羊家に従へば史實は全く假借である。衰亂より升平、升平より太平に進むべき理想を示すを得ば足れりとするのである。故に『世愈亂而春秋之文益治』⁹⁾といふことになのである。猶公羊家はよく大一統といふことを言ふ。一統とは割據に對して言ふことにて從て大一統といへば互に國家を立て、割據することなく世界全く一に歸したる状態を言ふのである。即ここにいふ太平の世に相當するのである。

次に異内外といふことであるが、これは張三世と離るべからざる關係を有する者である。異内外とは前に引ける何休の註に見ゆる『内其國而外諸夏、内諸夏而外夷狄、夷狄進而至於爵』といふことである。之によれば孔子の外國に對する思想は三世に從つて異なるのである。即ち衰亂の時代に於ては先づ内より治むるを要す、内治まりて始めて外に及ぶべきである。故に此時代には其國を内にして諸夏を外にと言ひ、夷狄は勿論假令文化の進みたる國なりとも自國以外の國をば排斥するのである。升平の時代に進では諸夏を内にし夷狄を外にと言ひ、文化の進まざる夷狄をば之を排斥するのであるが、文化の進みたる國に對しては最早自他の區別を設けないのである。更に進んで太平の時代に入らば自國と他國、諸夏と夷狄との區別全く無くなり、世界はすべて一同に歸するとするのである。茲に衰亂の時代升平の時代に於て何故に自國と他國、諸夏と夷狄の區別を立つるかといふに『内其國而外諸夏、内諸夏而外夷狄、言自近者始也』¹⁰⁾と言ひ、近きより始め次第に遠きに及ぼすの義も存すれども、諸夏と夷狄の區別を立つるに就いては

8) 劉逢祿『公羊何氏釋例』卷一

9) 『春秋公羊傳』隱公元年に『何言乎王正月、大一統也』とあるに本づく

10) 『春秋繁露』王道篇

尙一つの重要な要素が含まれて居る。皮錫瑞曰はく

『聖人心同天地。以天下爲一家。中國爲一人。必無因其種族不同而有岐視之意。而升平世不能不外夷狄者。其時世界程度尙未進於太平。夷狄亦未進化。引而內之。恐其侵擾』¹¹⁾

即ち是れ全く人種の相違といふことに本づく偏見に非ずして、文化の程度の相違に根柢するものである。即ち諸夏の文化が夷狄の爲めに破壊せらるるを保護せざるべからずといふ考に出づるのである。されば夷狄と雖文化が發展するに従ひて之を諸夏と同様に取扱ふこととなるのである。攘夷といふことは『春秋』に於てやかましき事なれども、公羊家に従へば是れ其一端の論にして終局の理想に非ざるものである。

以上述ぶる所の公羊家の思想は前にも一言せし如く近時禮運に見ゆる大同の理想と結び付けて説かるることとなつた。そがいかにか結び付けられて居るかといふに即ち太平の世を以て大同の世と同一視し、升平の世を以て小康の世と同一視するのである。余は未だ此結合が何人に始まるかを確かめ得ざるも、余の知れる範圍に於ては廖平及び康有爲の書に於て始めて之を見るのである。¹²⁾ 尤廖平は『博士雖爲儒家、問言大同、如小戴禮運……公羊之大一統』といへる外、大同と太平、小康と升平を同一視したことに就いて纏りたる明文はなきも、其著書殊に『知聖續篇』の一篇を讀まば此兩者を同一視せしものなることを了解し得るのである。康有爲に至つては其著書の多くの者に此點を明言して居つて、『大道者何、人理至公、太平世、大同之道也、三代之英、升平

11) 皮錫瑞『春秋通論』

12) 皮錫瑞『春秋通論』の中に『王化自近及遠、由其國而諸夏、而夷狄、以漸進於大同』とあるも、未だ明白に大同小康を以て太平升平に當てたる語を見ず。

世、小康之道也』¹³⁾といへる如き其一例である。

然らば大同小康と太平升平を結び付けて考ふるに至つた此等近時の學者の理想は果して如何といふに、其根本思想に於ては固より從來の思想と異なる筈はなきも、唯少しく其色彩が近代的となつて居るのである。廖平は孔子の理想を以てもと支那一隅の事を言ふのみに非ずして一面一國の政治を説くと共に又他面に於て世界平和の理想を説きたるものなりとする。そこで彼は學問を小學と大學とに分ち小學は王伯小一統の學であつて大學は皇帝大一統の學とする。即ち前者は小康の世の理想をのべたるものにして後者は大同の世の理想を述べたるものとするのである。而して皇帝の政治はすべて世界主義大一統の政治であるが、其中につき程度によりて更に皇と帝との二種の政治が生ずる。王伯の政治はすべて國家主義小一統の政治であるが、それが程度により更に王者の政治と伯者の政治との二つに分れるのである。而して現代は其何れの時代に當るかといふに言ふ迄もなく小一統の時代而も伯者政治の時代である。此伯者の政治が一步進めば今度は王王より進んで帝、帝より皇の政治に至つて世界は始めて大同の世となるといふのである。¹⁴⁾康有爲は其始廖平の學を祖述したといはれて居るが、其數多き著書に於て頻りに大同の理想を高調して居る。彼は今日の如く國家が對立して居ては戦争は絶ゆる機なく、人民はいつまでも塗炭の中に苦まざるべからずとなし次の如く言つて居る。曰はく『欲_レ安_レ民者非_レ弭_レ兵不可、欲_レ弭_レ兵者非_レ去_レ國不可、是故國者在_レ亂世爲_レ不得已而自保之術、在_レ平世爲_レ最爭殺大害之道也』¹⁵⁾と。然るに今日の勢一朝一夕に國家を破壊し去ることは不可能である。故に先づ國家の聯合を劃し之を

13) 康有爲『禮運註』

14) 廖平『知聖學篇』及び『藝文』第八年第五號拙稿『廖平の學』參照

15) 康有爲『大同書』乙部

以て大同に進むの階級と爲すべしといつて居る。而して國家聯合の一として『各國平等聯盟』といふことを述べ、『各國平等聯盟者、如春秋之晉楚、權力相等、訂盟弭兵、而諸小國從之』¹⁶⁾と言つて居る。更に進んでは聯盟の代りに公政府を立て之を以て各國を統一する。此公政府の基礎固くなると共に各國家の色彩は漸次薄らぎ行きて遂にはすべての國家は皆無くなり唯一つの世界となる、これが即ち大同の理想の成就せる太平の世なりと爲して居る。而して此時代に至らば固より國境といふものもなく、人種の區別もなく、又貴族平民の別もなく、帝王もなく總統もなく、人民は盡く平等にして只統治者として議長あるのみ。全地の海陸皆公有に歸し、人民はすべて私産なく公に養はるゝことゝなるといふが如き種々の個條を列舉して居る。¹⁷⁾これが即最近に於ける大同の理想の概要である。

三

叔禮運の大同小康の一節は思想上古來議論の存する所なるが故に最後に一言を附加へる必要があらうと思ふ。元來『禮記』といふ書物は周末秦漢時代の學者の禮説を、漢の宣帝の時戴聖といふ者が輯録したるものなれば、各篇の作者及び著作の年代等多くは明でない。禮運篇は普通に孔門の子游の作或は子游の徒の作と言はれて居るが、その基本文に孔子と子游との問答が記されて居るが爲めであつて、他に確證あるに非ず、従つて古來之に就いて疑を挿むものも少からぬのである。殊に甚しきに至つては冒頭の一節を以て儒家の思想に非ずとし、之を以て道家墨家の思想に近しとするものがある。例へば『黃氏日抄』¹⁸⁾には

16) 『大同書』乙部

17) 康有爲『大同合國三世表』

18) 黃震『黃氏日抄』卷十八

『雖思太古^上而悲^上後世。其主意微近於老子。』

といひ、又『困學紀聞』¹⁹⁾には呂祖謙を引きて、

『呂成公謂蜡賓之歎。前疑之以爲非孔子語。不獨親其親^上子其子^上而以堯舜禹湯爲小
康。是老聃墨氏之論。』

と言へるが如き即ちそれである。そこで邵懿辰の如きは禮運の首章に錯簡ありとし、『禹湯文武成
王周公由^レ此其選也、此六君子者未^レ有^レ不^レ謹^レ於禮^上者也』の二十六字を、小康の條より抜き取りて
之を大同の記事中に挿入し、禹湯文武を小康の君とするの不都合より遁れんとし、六證をあげて
論じて居る。而して皮錫瑞の如きも亦之に賛意を表して居るのである。一體儒家の思想が其一部
分に於て他の諸子の思想と類似するものありとて、それは敢て怪しむに足らざることなるが、大同小
康の一節に於ては鄭玄の註にも屢老子の語を引けるが爲めに、益老子の思想に出でたるかの疑を
強めたものであらう。然るに此感は次に示す姚姬傳の説を以て十分に打破することが出来ると思
ふ。曰はく²²⁾

『夫老莊之說。以^レ禮爲^レ忠信之薄而亂之首。若^下子游之所聞^上於孔子^上者。則以^下天下風俗既薄。
必曲爲^レ禮。而後可^レ存^レ其忠信^上而爲^レ治。此於^レ老莊之旨^上遠矣。至于唐虞三代氣運之有^レ淳漓。固
老莊嘗言^レ之者。然亦未^レ嘗誣^レ也。豈必爲^レ之諱而後爲^レ儒者之說^上哉。』

又『不^レ獨親^レ其親、不^レ獨子^レ其子』といふことが墨子兼愛の思想に似て居るといふも、元來仁の
極致は兼愛の結果と一致するものにして、此點に於て儒墨は只其次第順序を設くるや否やの差異
に歸す。然るにこゝには獨り其親を親とせず獨り其子を子とせずとありて、先づ其親を親とし其子

19) 卷五
20) 困學紀聞
21) 禮運通論
22) 王應麟三經

を子とするより擴充したるものなることを知り得べく『孟子』に所謂『老吾老 以及 人之老。幼 吾幼 以及 人之幼』²³⁾といふものと何等異なる所を認めない。尤これを以て孔子自身の語と見る時は稍矯激に失するの嫌あるも、是亦姚姬傳のいへる如く、此等の説本七十子が孔子より聞きて之を其徒に轉授し、而る後其門流の手によりて記述されたるものにして、其詞氣抑揚の甚しきは、蓋し屢傳へて其本眞を失へるものあるべく、さりとて是が全く聖人の旨に非ずといふことは言へないとするが妥當の見であらうと思ふ。²⁴⁾殊に此等の思想は其根本に於て『大學』の修身齊家より治國平天下に進むべきを説き、又『論語』に『四海之内皆兄弟也』²⁵⁾といへる如き思想に對照して少しも相容れざる點を見出さぬのである。之と反對に道家の思想を觀るに其書中に屢理想國を描いて居るが、いづれも大同の理想社會に比して全く趣を異にするものである。例へば『老子』八十章の理想國にしても、『莊子』の建徳の國、²⁶⁾さては『列子』の飢輒の山に²⁷⁾しも、いづれも其描く社會が小社會に限られて居り又最原始的なる生活を理想とし、且所謂道德といふものを全然排斥するといふ特徴が共通して居るのである。之を大同の社會が世界の一統を目標とし、社會の進化を是認し、又道德を以て人生唯一の務めと觀じて居るに對して既に其根本に於て全く種類を異にするものなることを知るに足るのである。之を要するに大同の理想は道家の思想にもあらず、墨家の思想にもあらず、純然たる儒家の思想であると見て誤はなからうと思ふ。猶公羊家の三科九旨の思想が果して孔子の本意を得たるものなりや否やに就いても説明を要するのであるが、今絮説を避け余の結論のみを言はば、公羊家の此思想は孔子自身の説にはあらざるも、かゝる思想を引出すべき要素は孔子の思想中に既に含まれ居たりといふことに歸するであらうと思ふ。(完)

23) 『孟子』梁惠上卷十六
 24) 『孟子』梁惠上卷十六
 25) 『論語』顏淵篇
 26) 『莊子』山木篇
 27) 『列子』湯問篇